



The Royal Photographic Society

Patron: Her Majesty The Queen. Incorporated by Royal Charter

NEWS LETTER

第 27 号 2013/11/01

発行所 英国王立写真協会・日本支部
〒107-0052
東京都港区赤坂9丁目1番7号
赤坂レジデンシャルホテル482号
電話：03-6721-1590
FAX：03-6721-1590
email: rps-japan@nifty.com
発行人 三宅善夫 編集人 川村賢一

<http://www.rps-japan.org>

平成25年度 支部総会 / 懇親会開催

～新たな発展に向けて～

去る7月6日(土) 東京六本木の霞会館にて、総会および懇親会を開催する。

懇親会に先立ち、林喜一前理事長によるスライドショー「ベトナム撮影紀行」が披露され、デジタル写真の第一人者による完成度の高い情緒あふれる作品群を参加者一堂心から堪能した。(その一部は、添付別紙にて紹介。)

今回の総会では、数年前より懸案の支部の健全な運営の問題と、理事組織の刷新、役割分担が大きな議題となった。

これらについては、前林理事長を中心に2年間理事会での討議を重ね、大幅な規約改正を含めた多くの議題が承認された。

この中で、運営経費の圧縮と理事にはボランティア精神での貢献が求められ、その上で年会費の大幅な値上げという痛みを伴う改革が決定された。年会費の額については、他の写真諸団体の年会費などが比較検討された。

また、これまでは、RPS本部会員資格者であることが、唯一支部会員となる条件であったが、かねてより懸案であった「支部会員」制度を実現し、広く会員を募集し、RPSの知名度の向上と活動の幅をよりいっそう広げることとなった。「支部会員」は、将来RPS本部会員へ向けての予備軍という位置づけとなる。

こうした改革決定のもと、三宅新理事長の基本方針である「本部との繋がり、世界との繋がり」をより意識した活動の発展を進めていく。これこそ、他の写真団体とは異なる、英国王立写真協会のアイデンティティに他ならない。



写真：懇親会スナップ

第11回リレートーク 「鏝鉄」～廃線を追う

8月31日、東京六本木の「霞会館」にて開催。
今回は、鉄道の廃線、遺跡の記録をライフワークとして全国を駆け巡る渡部会員に独自の写真観をお話しいただいた。
(本文次頁)

写真上：「明日に向かって走る」木曾森林鉄道
写真下：青森港



渡部会員は、1953年生。はじめて手にしたカメラ「フジベッタ」で撮った写真が、朝日新聞のフォトコンテストに入賞。以来、中学、高校では写真部で活動。大学では、学習院女子部中高等科の写真部コーチを努め、さらに独学で写真技術、知識を深める。還暦を迎え、雑誌「写真の教室」の取材も受ける。

渡部 誠

鉄道マニアの系統

ひとくちに鉄道マニアといっても、実に幅が広く、「撮り鉄」、「乗り鉄」、「音鉄」、「収集鉄」さらに「模型鉄」、「受信鉄」、「葬式鉄」などと呼ばれ、最近増えた女性マニアは「鉄子」と呼ばれている。

廃線マニア

新たに「廃線マニア」というジャンルもでき、「跡地」「廃車輛」「廃駅」などを追っかけている。

たとえば九州の宮原線の「跡地探索」では、線路ももう残っていないので、ただの田舎風景だが、辿っていくと、トンネルとか陸橋があり、大変人気がある。とくに陸橋は、物資が乏しい戦中のもので、竹筋コンクリート造のアーチ橋という珍しいものだ。

また、長崎県の島原半島のありふれた道路にトンネルの入口があるが、マニアから見ると、断面形状ですぐ鉄道のトンネルだと分かる。鉄道トンネルは、必要最小限の空間を掘ってつくるので、下部がすぼまっている。廃線跡の道路は微妙なカーブの連続で、鉄道の廃線跡だと確認でき、写真を撮る。一般の道路は、直線からカーブに入り、また直線で進むが、鉄道の場合は、カーブに入るまでに緩和曲線を設けて、車両の横転を防いでいる。

次は山形県鶴岡市の庄内交通の湯野浜線の「廃車両」の例で、駅の中に電車が1両放置されている。

また大井川鉄道では、全国から古い車輛を集めていて、見るからに凄まじい廃車輛を工場で直し、SLの運行をして動態保存しているのが凄い。夏から秋にかけては、雑草やツタが生い茂り、容易には本体に近づけないが、秋冬には車体の下に潜り込むなど、廃車両でなければ絶対に撮れないアングルでの撮影もできる。

「廃駅」の例としては、出雲大社参拝用の出雲大社前駅がある。大変立派で、SLも一輛あり、現在も国の重要文化財として保存されている。

中には、発見するのに大変苦労したものもある。皇室の御料林であった山間地の終着駅だが、何度も通りながら分からないほど凄まじい廃墟だった。偶然「駅裏」と書かれた小さな看板を見つけ、それが駅であることが分かった。

「錆鉄」へのこだわり

私のこだわりは、あくまで「錆鉄」で、レールが敷かれたまま残っているところがメイン。しかもそのレールがさびていることが重要で、さびれている感じがしないと、なかなかカメラを向ける気がしない。今は忘れられて放置されている錆びた線路を見ると、とても郷愁を感じ、写真で記録に留めたいと思う。

JR外房線の新茂原駅近くの貨物駅跡地では、見事に錆びたレールの上に錆びたコーヒー缶が載っている写真を撮った。当時の人、路線夫が誰かが載せたであろうことを想像しての再現写真だ。



西武鉄道安比奈線

小坂鉄道（秋田県）



横須賀長浦港



西武鉄道安比奈線（埼玉県）



西武鉄道安比奈線（埼玉県）

レールを結ぶ鉄の部材を止めるボルトの山に出会ったとき、これらの錆びたボルトがお互いに会話をしているように感じた。ボルトは、最初工場で生産された後、それぞればらばらに散らばって、何十年もしっかりと働き、それが廃線を機会にまた集められ、旧交を温めているように感じた。これが私の錆鉄へのこだわりだ。

地図を見ていると、廃線マニアにはピンとくる怪しい道をよく発見する。

静岡県焼津近くの大崩海岸付近は、地方道、JR在来線、新幹線、国道新日本坂トンネル、東名の日本坂トンネルの5本が併走している交通の要所だが、かつて枝分かれていた廃線跡と思われる箇所を、航空写真で確認すると、きれいに緩和曲線で繋がっているのが読み取れる。これは旧在来線が崩れた後、現在は新幹線日本坂トンネルとなっているものを一時的に利用して迂回させた路線跡だ。

実は、新幹線日本坂トンネルは、旧日本軍が軍用弾丸列車用にまっすぐに掘っていたもので、それが利用された。後に新幹線が通ることになり、在来線用はまた現在の位置に掘られて移動した。廃線を辿っているといろいろな歴史が分かってくる。

廃墟の例としては、長崎の軍艦島が興味深く、トロッコ鉄道があるので是非撮りたいが、制約が多く、まだ実現出来ない。

廃線の要因としては、鉄道の廃業、営業休止、路線の付け替えなどがあり、技術の進歩による路線の付け替えもある。山梨県の勝沼ぶどう郷駅のトンネルは、強固なイギリス積レンガのトンネルで、勾配のきつい区間のため、かつてはスイッチバック式の駅だったが、車両の進歩で坂道でも発進が出来るようになり、廃線となった。現在史跡として遊歩道が整備され、一部はワインセラーとして利用されている。

鉄道との出会い

子供の頃、祖父に連れられてよく鉄道を見に行った。そこで祖父から「線路は日本全国に繋がっているんだよ。」と聞かされ、線路に耳をつけると、列車の近づく音が聞こえるのに感動した。「線路をカーンと叩くと、日本の果てまで響くんだよ。」と聞かされ、とても線路に興味があった。

記録に残したい思い

もうひとつは、廃線後の変化を感じて、再開発などの他、ときには廃村や廃集落にも繋がるということで、とても惜しいものとして、何とかこれを記録に残したいと思った。

再開発としては、勾配が一定で、行政にとってやりやすい事業なので、サイクリングロードになる例がとても多いが、もともと過疎で廃線となったところに、サイクリングロードつくっても誰も利用しない。先に行けば、草ぼうぼうで、人も通れず、典型的なお役所仕事だ。民間の再開発は、それなりにうまく利用され、人も呼び込む。

廃線後、一見普通の道路に見える場所でも、よく見ると「鉄道勾配表」など、様々な鉄道アイテムが残されていることがあるが、次第に市街地に呑み込まれて行く。私は、線路があるうちに記録に残したいと思い、全国を走り回っている。

道路の場合、レールはそのまま、アスファルトで埋めてしまうケースが多いが、線路の電柱だけ、回廊のように残っているものは、写真的にも面白い。

廃線の周辺には、かつて鉄道を中心に栄えた栄華の痕跡がある。岡山県の下津井電鉄の終着駅の例では、瀬戸大橋の開通と同時に、駅と連絡船が廃止になったが、当時の車庫にまだ車輛も残っていて、鉄道マニア、鉄道模型マニアには人気

の場所だ。駅前には、かつての栄華の後である旅館兼商店がある。このような場所が全国にあり、今後も記録に残していきたいと思っている。

かつて青函連絡船として活躍した八甲田丸には、期待して行ったが、レールは埋め尽くされていてがっかり。海外の例では、船内に線路があれば、そのまま保存されている。日本では、人がつまずいたら危ないという過保護な発想で、歴史的価値をどんどん失わせていて大変残念だ。

九州の三井三池炭鉱には、地下の坑道から、人や坑車を上げ下げするリフトの櫓が立っている。ここでは、とても元気な元炭鉱夫の90歳のボランティアガイドと仲良くなり、立ち入り禁止区域まで案内してくれた。こうした人たちの交流もとても大事にしてる。

宮城県のくりはら田園鉄道の車両基地跡では、気配を感じて倉庫の中を覗くと、保線車輛が片眼で私を覗いていた。人だけでなく、こうした「もの」との関わりを感じながらの撮影もしている。整備工場には、今しがた作業を終わったかのように、手袋や麦わら帽が置いてあり、たった今作業していたようにデスクの上にはタガネがあるが、錆びているので昔なんだなと分かる。火床があって、消火器も置かれている。このように生きたまま、時間が止まっているものを追っかけて撮っている。

鉄道を敷くというと、ともすれば自然破壊と思われがちだが、京都府の京都大学演習林の森林鉄道跡を見ると、すでに土砂に埋まりつつあり、崖崩れで線路が崩落し、自然はどんどん自分を取り返していく強い力があるのが分かる。木材はバクテリアによってどんどん分解され、西武鉄道の安比奈線では、電柱が線路脇の樹に呑み込まれている。

撮影計画

まず、資料本や地図読み、航空写真読みに時間をかける。地図で見ると、直感的に怪しいところが見つかるので、これを航空写真で拡大して確認すると、間違いなく鉄道や車両基地跡だろうと確信が深まる。また、光線読みに関しては、iPadで太陽の位置を調べる。何月何日の何時に行けば、路線跡と朝日を一直線で撮りたいというときにも大変便利だ。

装備に関しては、防塵防滴のペンタックスのカメラを愛用し、突然の天候変化にも対応。水、食料の他、熊除けの鈴、蜂や毒蛇のボイズリムーバーも必需品。着るものに関しては、仕事の出張先で、ちょっと路線跡に寄る場合は、スーツ姿のまま撮りに行くが、地元の人に鉄道会社の社員と思われる、「ご苦労さん」と言われる。また、廃線跡を確認しに来ている作業員のような、ヘルメット、作業服と測量棒も検討中だ。棒は、蜘蛛の巣を払うのに必要で、GPS付きのiPadは、山中で自分の位置を確認することが出来る。

現地訪問は、夏は、雑草や樹木が生い茂って、現場を見つけることも難しく、容易に近づくことも出来ない状態なので、どうしても冬が中心になる。交通の便も悪いので、レンタカーで行動するが、地元の産業館や展示館に寄り、昔の地図や当時の情報を入手する。

廃線の現状

忘却放置されているものは、ただ草むらや土に埋まりつつあるものもあり、いくつかの米軍基地にも忘却放置された廃線がある。



フォト七宝の世界展訪問

写真芸術研究所

静態保存の例では、廃線がそのままきれいに残されていて、脇にカフェのテーブルがセットされている珍しいケースもある。小樽の国鉄手宮線の一部だが、きちんと観光資源として残されていて、理想的な保存だ。山形県の酒田の例では、港に米を運んだ備蓄米の倉庫とともに残され、地元の人たちが環境整備をしている。長野電鉄の屋代線では、ブルーシートに覆われた車輛があり、ブルートレインと洒落て、写真に納めたが、その後すべて撤去されたと聞く。

秋田県の小坂精錬の私鉄であった小坂鉄道では、地元ボランティアが環境整備を行い、レールバイクが走れるようにしている。私もこのNPOに加入して、足こぎ保線車に乗せてもらったが、鉄橋やトンネルをくぐり、傾斜地ではかなりのスピードで、スリルも味わえた。

「3.11」の衝撃と新たな思い

東北大震災の後、廃線になったリアス海岸の鉄道を撮りに行かないのかと、尋ねたとき、多くの犠牲者を出したその廃線を撮りに行くのは、大変気持ちがはばかられた。一時は廃線を追いかけることすらやめようかとも思ったが、たまたま仕事で青森港に行ったとき、津波で廃線となったレールを短く切ったものが積み上げられているのを見つけた。おそらく中国に鉄資源として輸出される場所だった。その中に廃材が天に突き出しているような場所を見つけ、「頑張るぞ!」と言っているように感じ、私もまた頑張って廃線をつり続けようと思いを新たにしたい。

国鉄宮原線に、かつての陸橋があるが、今では緑が深くてなかなか見つからない。長さ300mもある竹筋コンクリートの陸橋だが、残念ながら今は見渡すことが出来ないで、何とか杉木立を伐採して、産業遺産として残して欲しい。

今では写真でしか残せなかったものもたくさんある。日本で最初の鉄道「新橋～横浜間」のレールが今も、シュローダー Co. (当時鉄道に資金提供した英国の銀行) の受付にきちんと額に入れて保存されてる。三宅理事長から情報を伺い、紹介していただいた。一般のレール断面は、枕木に接する下側は幅が広く安定した形状だが、初期のレールの断面を見ると、下側も丸い双頭レールで、これは、上側が磨り減るとひっくり返してまた使うという形式だ。英国の古いレールで、刻印もはっきり読み取れた。もちろんこれが、日本最初の廃線なので、この撮影はとてうれしい。

廃線追っかけの楽しみ

私は、ときおり擬人化して、貨車と握手したり、ジャンケンをして遊んだり、「もの」との交流もやっている。

廃線フォローの余録として、秘湯とか野湯巡り、それとB級グルメが楽しい。

今後の活動目標としては、対象物を今まで以上にじっくり観察し、相対していきたいと思っている。また、心の中の「心象風景」を写真で表現していきたい。さらに撮影技術の向上については、「真似ること」が「学ぶこと」の語源なので、まず皆さんの真似をすることを恥じずに、精進していきたいと思っています。

13年9月9日～14日、東京銀座の STAGE 銀座にて開催された、七宝（ホーローの一種）による写真表現というユニークな写真展を訪問。

これは初代青木朗理事長が起こした写真芸術研究所によるもので、デジタル技術の発展に伴い「写真画」という新境地を開き、写実的で色あせない新たな写真表現と写真の半永久保存を目指したものだ。

金属などの表面にガラス質の色釉(いろぐすり)を焼きつける工芸技術に、最新の写真技術を導入した新たな表現手段を獲得し、すでにB5サイズまでの実用化に成功し、作成販売を記念しての展示会となった。

コストや金属板という製品の性質上、一気に利用が広まるとは考えにくいですが、多くの可能性を秘めており、建築や記念碑などへの応用も考えられ、陶板とはまたひと味違う使い方があるのではと感じた。



写真：故青木朗初代理事長



訂正とお詫び

前号で紹介した菅田会員の写真の記述に間違いがありました。ここに訂正し、お詫び申し上げます。

(誤) スイス ユングフラウ

(正) フランスアルプス モンブラン山群

(編集後記)

今回大きな改革が断行されたが、「支部の会員は、様々な考え方、表現を異にしても、会員同士が自由に集い、お互いの発表の場を持ち、良い面を吸収しようという雰囲気がある。これは他団体にはない最大の長所だ。」という林前理事長の言葉を改めて思い起こし、力を合わせてさらなる発展に繋がりたいと思う。ご協力お願いいたします。

(川村)

第 8 回リレートーク
「新聞写真が一番」 4



上田 顕人

肖像権について

締め括りとして「肖像権」について触れてみたいと思います。肖像権は新聞写真にとっても、写真を撮られる皆様にとっても重要な問題であります。特に街中でスナップ写真を撮る際は、撮られる側の人について十二分に配慮しなければなりません。面白い被写体を見つけると、とかく撮りたいという意識が先に働き、許可を得ずにカメラを向けがちです。

リアリズム写真を提唱し、絶対非演出が持論だった土門拳もこの点には大変悩み、「スナップ写真、黙って撮る権利はあるか」と問いかけながらも、許可を求めている内に決定的瞬間を失っては元も子もないとも言ってます(『写真作法』)。その点が私たちも常に判断に迷う所で「撮影が先か、許諾が先か」は簡単に結論を出すことはできません。

肖像権とは

肖像権とは、顔や姿をみだりに撮影されない人格権、顔がはっきり判る写真を勝手に公表、利用されない権利、肖像が持っている財産的権利などを指し、は健康や幸福を追求する権利を定めた憲法 13 条(個人の尊重と公共の福祉)に基づくものです。

肖像写真を許可なく公表して社会的信用を失墜させた場合は名誉毀損になり、名誉毀損にならなくても人に知られたくないことを暴露された場合はプライバシー侵害に当り、判例もいくつかあります。

撮影、公表が許されるのは 本人の承諾を得ている 社会的相当性がある(総理大臣など公的立場にある人など) 場合です。「承諾」とは、本人が写されることを許した場合と、周囲の状況から写されることが予期できるのに拒否しなかった場合(暗黙の了解)です。

撮影現場の心構え

私は新聞、雑誌、写真展などで発表する場合は可能な限り承諾をもらう必要があると考えています。写真の内容にもよりますが、発表はせず、趣味で写真を楽しむ程度では必要ないでしょう。

しかし、撮られる側は発表されるか、されないかは判りませんので、無用なトラブルを避けるためにも一声かけることを心掛けたいものです。

プライバシーが重要視される米国では、例えば A P 通信のカメラマンは、人の写る撮影では全員の了解をとるよう徹底的に指導されるそうです。

朝日新聞からニューヨークの A P 通信に研修に行った後輩カメラマンは、撮影現場から帰ってくると、毎回、全員から了解を取ったかと聞かれたそうです。それくらい米国では肖像権に対する考え方がシビアで厳しいわけですが、そんなことをしていたら良い写真なんか撮れないですよ。

定年後 12 年が過ぎた今でも新聞写真の撮影を依頼されています。朝日新聞夕刊の連載で「ひとえきがたり」(火曜付)は 3 年目を迎え、4 月からは新連載「街プレーバック」(金曜付)も撮っています。「街」は記事とは独立してカメラの目で見つけた今の街の姿を撮るシリーズで難しくはありますが、やりがいも感じて楽しんでいます。

夕刊の場合は現在約 4 百万人(朝刊は 7 5 0 万人)の読者が見てくれます。家族を入れればそれ以上です。これが最大の張り合いでもあります。友人から個展をやったと言われるのですが、私自身は、個展以上のことをやり続けていると自負していますので、今のところ写真展は考えていません。

ありがとうございました。

【質疑応答から】(敬称略)

林理事長：記事の内容を読んでから絵づくりするという話は、大変勉強になりました。そういうことが非常に大事だと思いました。その苦労も大変よく理解できました。

上田：俗に記者には「現場 1 0 0 遍」という言葉があり、写真も同じで締切りまで何回でも足を運ぶようにしています。気に入った撮影対象を見つけたプロは内外を問わず何回も通いますが、同じことは定点撮影にも言え、現場 1 0 0 遍に当ります。富士山を撮り続けておられる田中会員もそうです。

定点撮影という手法は、現場付近に住むアマチュアにしかできません。秋山庄太郎がよく言ってましたが、「常に現場にいて四季を撮れるアマチュアにはプロは絶対勝てません」と。けだし名言です。

川村：新聞社のカメラマンは助手をつけず、いつも単独ですか？

上田：大事件、大事故では複数の部員が取材しますが、基本的にどんな取材も全員単独で写真部に助手は存在しません。戦前は今のストロボに代るものとして、マグネシウムの粉を焚きましたのでボン焚きと呼ばれる助手がいました。

川村：新聞の桜や紅葉などの季節写真では人物必ず写っていますが、肖像権の対応は難しいのでは？

上田：新聞の風景写真では、点景としての人物は欠かせません。顔がはっきり見えるように配したい時は声を掛けるようにしています。「新聞に載せるのですが」と声を掛けると喜んでくれる人も多いですね。



写真

後輩が千鳥が淵でボートに乗り、満開の桜を楽しむペアの写真を撮り、一面に掲載した所、本人から撮影を許可した覚えはないと抗議がありました。桜が主役ですから当然ボートも小さく、本人以外は判らない写真でしたが、本人が判ったと言うのですから家族や友人は判った可能性があります。

何気ないカット写真でも男女のペアが写っている場合、了解を得ないで撮ったため問題になったケースは何回もあります。

川村：東日本大震災の写真ですが、日本のメディアでは死体がほとんど写っていませんでした。逆にそれが違和感があって、現実でないような、やけに静寂で、美しさを感じてしまうような撮り方が多いように感じるのですが？

上田：確かに遺体写真を新聞に掲載することは今でもご法度ですが、インターネットで見る外国のメディアなどでは、バンバン死体が写っていましたね。ですが、未曾有の大震災のようなケースでは、私はその辺は打破してもいい時期に来ているのではと思っておりますがどうでしょうか？

1970年、三島由紀夫が自衛隊で割腹自殺して首を切り落とされた現場を同僚がスクープ撮影しましたが、編集局長、写真部長らで議論した結果、朝日は夕刊最終版一面に大きく掲載しました。三島の首はぱっと見ただけではよく判らないのですが、よく見ると画面左下に2つ首が写っていました。

写真説明も首については触れずに東京朝日は掲載しましたが、同じ朝日の西部(九州)版では写真部長判断で首の写っている左をカットして使い、スクープ価値のない扱いになってしまいました。この写真の場合は、指摘しなければ生首に気づかないという点からは紙面掲載は許容範囲でした。

私の体験では、史上最大と言う118人が焼死した大阪・千日前デパートの火災(1972年)で、逃げようと窓際に折り重なった遺体を一面に掲載したことがあります。撮影に当たってストロボは使わず、逆光撮影のシルエットで表現しました。それでも編集局長室でさんざん議論され掲載が決りました。

川村：ベトナム戦争の頃、岡村昭彦が撮った写真も日本ではどこも使わなかったが、ライフが全部買い取って大特集を組み、岡村さんは有名になったという話を聞いています。

上田：私の同僚でもあった石川文洋さんがベトナム戦争中撮った写真で、首の吹っ飛んだベトコンの遺体を米兵がぶら下げているショッキングな写真があるんですが、当然、新聞もアサヒグラフも使いませんでした。そこで彼は自分の写真集で使いました。

天安門事件でも虐殺され、素っ裸でトラックに逆さ吊りされている兵士の写真がありました。外国のメディアでは使っていました。

森：著作権は、新聞社にあるんですか？

上田：取材経費は会社ですから、第一次著作権は会社にあります。風景写真など気に入った写真は、数カットだけは会社に残し、残りは自分で保存するようにしました。

再使用は大事件でない限りほとんど無いので、死蔵するより撮影者が保存して随時、会社名のクレジットを入れて使用する方が有意義ではないかと考えています。

日比谷：風景写真などでは、時間帯とかいろいろ工夫されて、空の色とかこだわっているのに、実際の紙面では、だいぶギャップがありますが、その辺フラストレーションとかないですか？

上田：ポジカラーの濃度差は仮に1:100とすると、新聞写真では濃度差は1:25程度にしか印刷できません。今

はカラー輪転機が改良され、ある程度はカラー印刷も見映えるようになりましたが、高速輪転機で紙質の低い新聞用紙に印刷するのですから、限界はあります。

林：それにしても、伝書鳩の時代を通り抜けてきたんですから凄いですね(笑)。その時代の方が、何かロマンがあったように感じます。

上田：今はデジタル時代になりましたが、撮影から現像、プリント、送信も含め矢張りアナログ時代が一番で懐かしい限りです。(完)

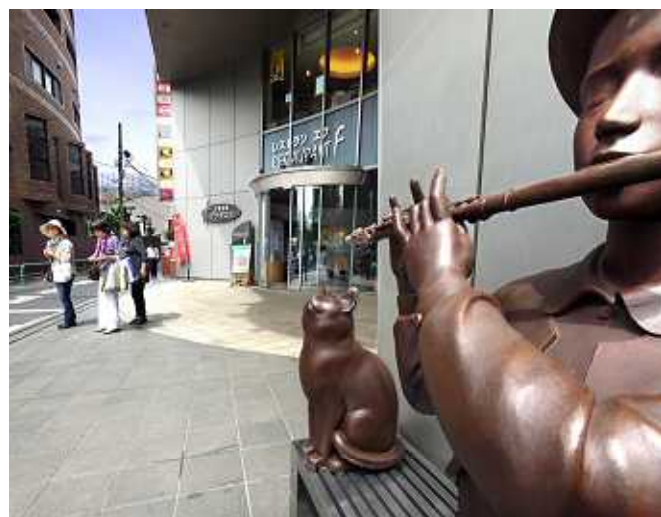


最近の活動

今年4月に始まった「街プレーバック」は、文学や映画、音楽などの作品や歴史的出来事の舞台から筆者がテーマを決め、今の街を再訪する企画ですが、写真は例えば文学なら原作を読んで取材にかけ、カメラの目で印象的な舞台を絵にしています。

1回目は古今亭志ん生が半生を語った『びんぼう長屋』で、売出す前の志ん生が昭和の初め住んだ業平のおんぼろ長屋の話でした。今は長屋はマンションに姿を変え、昔日の面影は全くありませんが、業平は東京スカイツリーで脚光を浴びるようになりました。

そこで、スカイツリーを写し込むカットに決めロケハンした結果、桜の開花に合せ初めてツリーが桜色に照明されることが分かりました。夜桜とのマッチも考えましたが、今年は開花が早く掲載時には葉桜になるため、マンション街になった業平を眼下にするアングルに変え、物にできたのはロケハンも含め5回目の撮影でした。ツリー全体が見える写真は避け、一部だけを見せた写真を掲載しました(写真上)。



以後、幻の東京万博の晴海（同 ）、漫画家・滝田ゆうが少年時代を過ごした遊郭・玉の井（同 ）、内田百閒『ノラヤ』の番町・麹町（同 ）、戦時下、餓死させられ絵本になった『かわいそうなぞう』の上野動物園（同 ）、向田邦子の『寺内貫太郎一家』の谷中（同 ）などを手掛けました。

引続き高円寺、早稲田、神楽坂などを取材する予定です。



百里基地撮影会より



写真上2枚：本村政治

写真中2枚：森誠子

写真右下：川村賢一

平成25年度懇親会特別企画
「林喜一のベトナム撮影紀行」

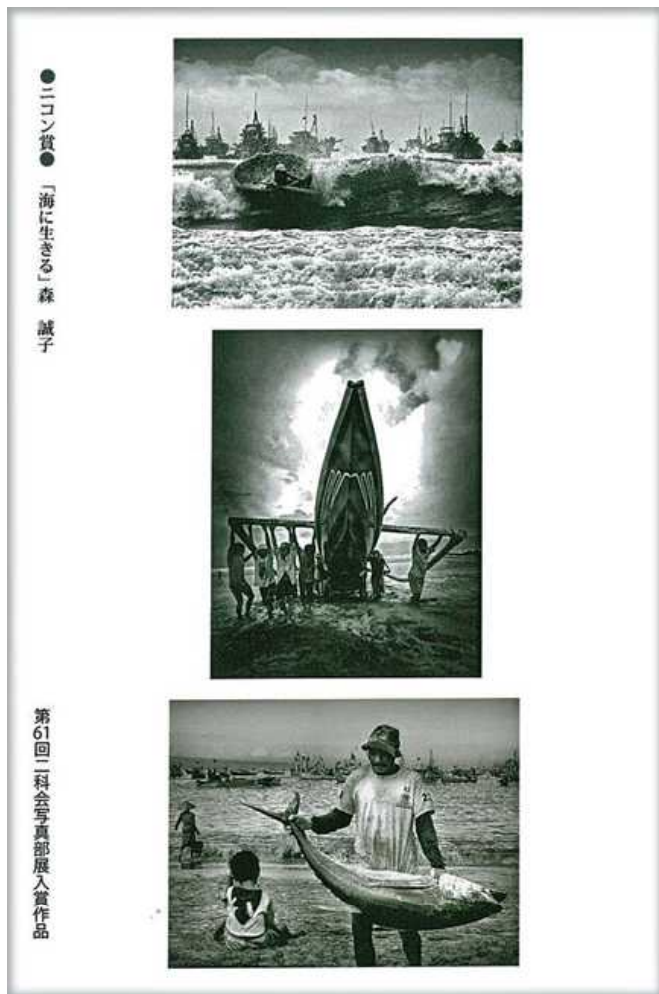
親睦会に先立ち、林理事による写真と音楽のライドショーが披露された。写真協会らしい企画で、刺激的なすばらしいパフォーマンスを楽しんだが、その一部を誌面で紹介します。



森誠子会員 二科会入賞

ニコン賞受賞

森誠子会員の組写真「海に生きる」が第61回二科会写真部展に入賞し、ニコン賞を受賞。



林喜一写真展「癒やしの国ミャンマー」

2013年11月8日～21日 東京新宿エプソン エプサイト

*同時に写真集も出版。



(編集後記)今回は前号までの積み残しを含めた拡大版です。